

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 28



鯉 幟(越智郡大三島)

柳原あや子さん 作

特 暮らしと環境 集

『ゴミと雑排水から生活環境を考える』

- 牛乳パック回収と過剰包装について
- ゴミの減量とリサイクル活動
- 合併処理浄化槽に魅せられて
- 私達の石けん作り運動
- 「捨てればゴミ、生かせば資源」を合言葉に活動
- 環境美化フォーラム '92

アングル

快適環境都市をめざして……………西条市長／桑原 富雄…………… 3

① 暮らしと環境 ② 集

『ゴミと雑排水から生活環境を考える』

牛乳パック回収と過剰包装について……………松山市／大院ミヤ子…………… 4
 ゴミの減量とリサイクル活動……………今治市／三宅 顕司…………… 6
 合併処理浄化槽に魅せられて……………小松町／久米 敏幸…………… 8
 私達の石けん作り運動……………宇和島市／梶原 涼子……………10
 「捨てればゴミ、生かせば資源」を合言葉に活動…八幡浜市／上村喜佐子……………12
 環境美化フォーラム '92 ……………川内町／大西 裕……………14

レポート

まちづくり草の根文化講演会……………16
 まちづくり見聞録 in ヨーロッパ ……………18

ふれあい広場

リレーでちょっとーク(東予市・松山市から)……………20
 元気印レポート……………22
 <年間活動日数 365日・大洲市新谷青年団>
 <第二期ほない鳴瀧塾スピリット・ほない鳴瀧塾>

Information

媛のくにフラッシュ……………26
 <新宮村・宮窪町・広田村・久万町・西海町・三間町>
 TOWN タウン通信……………29
 まちづくりセンター平成4年度事業計画……………30

特集「暮らしと環境」

今号のテーマ

「ゴミと雑排水から生活環境を考える」

近年、環境問題に対する関心が非常に高くなっています。その背景には、近代社会の生み出した様々な問題が影響しているわけで、今や環境保全に対する運動は、地球規模で行われています。

そうした中で私たちは、自分達の足元を今一度見つめ直し、一人ひとりの責任として出来ることから始めなくてはなりません。私たちの地球を守るために。

この「舞たうん」では、前号より環境問題にスポットをあて特集を組んでおります。そして今回はその第二弾、「ゴミと雑排水から生活環境を考える」と題して、地球にやさしい県内の実践者五名の方に登場願いました。さあ地球を守るのはあなたです。

表紙のことは

海に近い地方では、屋根の上を鯉のぼりが、十三〜十四匹も風につて悠然と泳いでる姿を見かけます。実に壮観です。海では男手が大切だからこのように立派な形で残るのでしようか。幟旗にも宝船や船の絵姿が見えました。

柳原あやこ



快適環境都市をめざして

西条市長
桑原富雄



選定されたことにあります。

論語の一節に、「近き者説べば、遠き者来らん」という言葉があります。

今日の解釈すれば、そこに住む人々が心から満足し、幸せを感じるまちは、自ずから遠くの人をも引きつける魅力のあるまちになるということではないかと考えますが、この言葉こそ、私達の目標とする『水と緑と文化をテーマにした潤いと活力のある快適環境都市』の姿であると思っております。

西条市が、このような快適環境都市の建設を志向する出発点となったのは、豊富な地下水が自噴する「うちぬき」が、昭和六十年に環境庁によって「名水百選」に

古来「水の都」と呼ばれた当市の清冽な水路も、高度成長期以降の都市化の進展に伴い、汚染が目立ちはじめていた時期に、この選定を受けたことが、市民の水への意識を高めるきっかけとなったのではないかと思います。

さらに、同じ年に建設省の実施する「アクアトピア構想」の指定を受け、続いて翌六十一年に環境庁から「アメニティ・タウン」の指定を受け、快適環境づくりの各種施策を総合的に展開することとなったことが、水を活かしたまちづくりの原点となりました。

このうちアクアトピア事業は、市街地中心部を流れる湧水を源とする河川約二・四キロメートルについて、自然石による護岸改修や水辺の緑化などの整備を行ったも

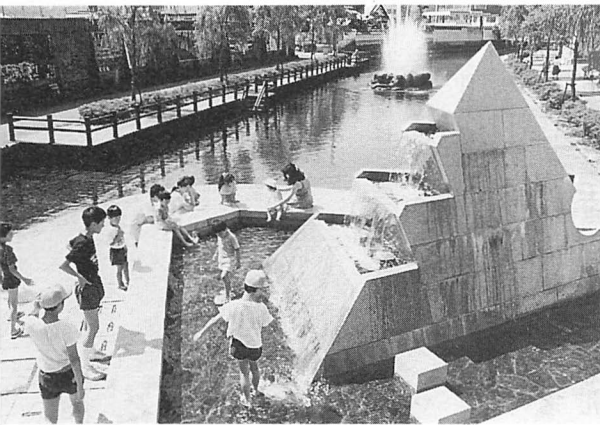
ので、これにより創出された良好な親水空間は、市民の憩いの場となるとともに、アメニティへの関心を深めるきっかけともなっており、環境美化のためのボランティア団体が自然発生的に組織されるなど、「アメニティ・タウン西条」の新たな象徴の一つとなっています。

こうしたハード面で「水」を活かすために様々な工夫をこらしたまちづくりが進む一方、平成元年を「環境美化元年」と位置付けて始まった、清潔で美しいまちづくり事業が多くの市民の積極的な参加を得て着実に進展しており、さ

らに今年三月には「河川の清流を守る条例」を制定するなど、市民と行政が手を携えて努力した結果が、「水の都」の再生として結実しつつあるのではないかと、ひそかに自負しております。

しかしながら、まちづくりとはそこに住む人々の幸福を無限に追求していくことにはかならず、そういう意味で、なお山積する課題を直視し、自らが時代を先導していく気概をもって、力をふりしぼっていかねばならないと自戒しております。

西条市は昨年、市制施行五十周年という節目の年を迎えました。先人たちのたゆまぬ努力によって築かれた我が愛する郷土を、さらに美しく、住みよいまちとして後世に引き継げるよう、半世紀最初の今年を「新しい時代への挑戦の年」と位置付け、内外に誇り得る「快適環境都市」の実現を目指し、市民と共に、知恵を出し、汗を流し、一日も休むことなく精一杯の努力を傾けてまいりたいと考えております。



特集 暮らしと環境

ゴミと雑排水から生活環境を考える

特
集

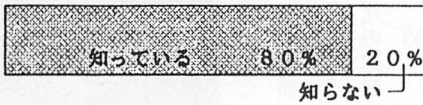


牛乳パック回収と過剰包装について

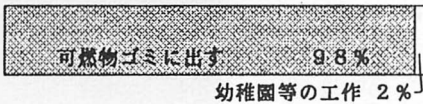
松山消費者団体連絡協議会会長

大院 ミヤ子

①あなたは牛乳パックに良質のパルプが使用されていることを知っていますか？



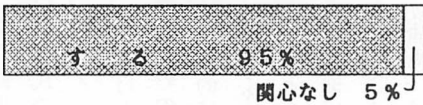
②飲み終わった空箱の処理は？



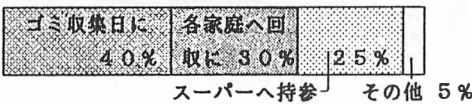
③購入先は？



④回収システムができれば協力しますか？



⑤どのような回収方法が良いか？



は現状では地元で処理できず、主に韓国に輸出し処理をしてから再輸入している。理由としては、瀬戸内海の汚染基準が厳しく現在の処理設備では処理が出来ない。然し、世界情勢から見て、何時までもバージンパルプに頼っているわけにもいかない。今、処理施設の研究者も専門家の協力で進めており、皆さんのご期待に応えることが出来るよう努力している。だから、

過剰包装について
業者との話しあい

環境問題に関心を持つようになって二十数年。地域のゴミ問題から地球規模の問題へと発展し、そして、緑の資源の大切さが身に染みて行動に移さずにはいられなくなったのは、今から十数年前のことでした。牛乳パックに使用されているパルプは良質で、その原料は一〇〇%外国からの輸入に頼っているという。果たして、一般消費者がこのことを知っているのだろうか？

松山消団連では、市内千世帯を対象にアンケート調査を実施しました。（左のとおり）

消団連では早速、市清掃課、市委託回収業者、古紙回収業者の代表の方々に集まって戴き、牛乳パック回収や引き取りについての会合をもちました。

結論は、地元で牛乳パックの受け入れ態勢ができていない、車や人件費が高む等の理由で物別れとなりました。

私達は早速理事会を開き、川之江市の製紙工場の見学と、牛乳パック引き取りの話し合いを持つべく申し入れをし、それが実現し

たのです。昭和六十三年六月のことです。三ヶ所の工場を見学した後、県紙パルプ工業会のご厚意で会議室を提供して戴き、工場の代表者の方と一緒に「紙の出来るまでのあらまし」について説明を聞き、早速本題に入りました。





◀前列右から4人目が大院さん▶

軌道に乗った牛乳パック回収システムを打ち切ることなく続けて行つてほしい。」とのことでした。それから一年後、川之江市のKYCピープルさんから受入態勢完備との連絡を受けました。早速、地域の協力態勢のより充実をと、かねてから計画していたPTA、婦人会等五団体の代表者の方に集まって戴き、回収協力についての話し合いを行いました。

そして翌年二月、西日本スーパー協会主催の「くらしの会議」に参加。消団連からは、牛乳パック回収場所の提供を提言しました。ところが、「それは売場に支障を来たすので無理」という回答。然し、私達はアンケート調査結果の「七〇%スーパーで購入」という資料を提出し、売った後の処理責任のことも併せてお願いをしました。その結果、地元スーパーの協力もあり、

五ヶ月後の七月より最終金曜日を「牛乳パック回収日」と決め、各団体の会員が六店舗へ出向き、回収が開始されることになりました。このことが、各報道機関や市の広報紙等で報道され、又、各店舗の店内放送等により消費者の意識も高まり、回を重ねる毎に量も増え、松山市民一日の消費量一リットル入り八万箱の回収にもうすぐ、というようになりました。

今後も、ビン容器切り替え運動と併せて、清掃行政への牛乳パック分別収集のお願い運動も推進していく方針です。

一方、「過剰包装の見直し」に

ついては、昭和五十五年からアンケート調査、店舗の実態調査を実施し、過剰包装と思われる現物を持ち寄つて、スーパーや百貨店の代表者との話し合いを繰り返し続けてきましたが、その都度、消費者の利便性、衛生面等の理由が繰り返され、運動が思うように進められませんでした。然し、昨年十二月に実施した店舗の実態調査や、無駄な包装と思われる現物を再度持ち寄り、百貨店を含む十店舗の代表者との話し合いを行ったところ、その結果はトレイに代わる紙容器包装の研究、ネット・ビニール包装への切り替え等、省資源・公害意識の高まりが幾らか見えて来たような感じで、これは包装の簡素化に繋がるものと期待しています。

また、業者側からは消費者の買物姿勢のモラルを指摘されましたが、このことは大いに反省すると共に、消費者教育の徹底を急がねばならないと感じました。

現在は、トレイ・バックリサイクル業者の協力で各スーパーへ回収拠点が出来、常時回収できるよ

うになっていますが、このシステムが確立されたからと言っても、無制限にパージントレイを使用することは許されないという消費者側の自覚も大切です。



◀牛乳パックの回収▶

消団連では、食品のトレイパック包装やあらゆる商品の包装簡素化と併せて、買物袋・風呂敷持参運動を続けると共に、牛乳パック一〇〇%使用のティッシュペーパー・トイレットペーパーが並べられていくこれらのリサイクル製品愛用運動にも併せて、消費者への行政の指導と協力を戴きながら、推進していくことにしています。

古紙100%無漂白トイレット
ペーパー 消費者展で展示し啓発



特集 暮らしと環境

ゴミと雑排水から生活環境を考える

特
集



ゴミの減量とリサイクル活動

今治市立花校区自治会長 三宅 顕 司

我が立花校区は今治の蒼社川に面した河南地区で、人口一万七十六人の小学校区です。校区自治会数は三十五自治会であり、また、各種団体は十六団体あります。自治会では、日頃から、校区内の環境美化を課題としてきました。平成二年十月に自治会総会を開き、

環境を良くする運動を提唱したところ、自治会長の全員の賛同を得て、「クリーン立花」と題して、環境衛生及び資源愛護リサイクル活動に取組み、推進する事に決定し、先ず校区住民に啓発をしていくことになりました。

「クリーン立花」の実施は、三月月に一度の割合で、校区自治会を中心に各種団体の協力により実行の運びとなり、平成三年三月二十四日に、第一回の「クリーン立花」を実施。公園、神社など、町内清掃を住民総参加で行いました。各自治会では清掃及びポイ捨ての空缶・空ビン回収し、七百五十キロの空缶・空ビン回収しました。また、資源リサイクル活動として、小学校児童及び、PTA

の協力で、古紙の回収を行い、校区全域より古新聞、古雑誌、ダンボール等、十四トン余りの古紙を回収しました。

平成三年度は年間四回の「クリーン立花」を実施し、校区内清掃、古紙の回収で汗を流しました。「クリーン立花」の実施前は、空缶・空ビンが、川の中や田畑に散乱して農家の人達からの苦情が多く困っていましたが、「クリーン立花」を実施するようになって、空缶・空ビン等がなくなり、農家の人達から喜びの声が多く聞かれる様になりました。校区住民が一年間、清掃奉仕に努力した成果であらうと思います。

校区内には「空缶・空ビンのポイ捨て防止」の啓発広報板を設置しています。今治市では十五校区の内七校区に、「空缶島」(空缶回収機)を設置して、空缶回収を啓発し活動を展開しています。一月月に二万三千四百五十七個の回収をしました。また、一年間には四十四万六千八百九十八個の回収の実績をあげています。近年、自動

古紙回収の様



販売機を多く設置しているので、飲みながらのポイ捨てが多く、特に高校生のポイ捨てには目に余るものがあります。空缶等の回収では、製造メーカーの責任も今後の課題であります。

平成四年度には、資源を大切にすることを啓発していく中で、一番の資源になる牛乳パックの回収運



ゴミ減量 啓発パレード



三宅さん

動を推進する計画をしています。平成三年九月より、中学校の教育の一環として、生徒会が回収することを決定し、現在回収中でありませんが、生徒のみの回収では九月より十二月の間で四〇〇キログラム程しか回収できないとのこと。

そこで校区全域の住民に、牛乳パックの回収を啓発し、回収する事に決定しました。

先般、川之江市にある牛乳パック再生工場「KYCピープル」を視察見学に行き、牛乳パックの再生状況を目で見て、いかに大切な資源であるかを再認識しました。

牛乳パックは、一リットル箱のパック三十三枚で一キログラムになり、この一キログラムでティッシュペーパーが三箱再生できるのだそうです。

日本は資源の乏しい国である事を国民一人ひとりが認識し、資源になる物は大切に回収し、再利用を考えねばなりません。いずれ日本には、人類が住めない時代がくると思います。今こそ、我々が資源リサイクルを推進せねばならないと思います。ゴミの減量推進は、家庭の主婦の手で取組みをせねば減量化はできません。現在のゴミの搬出量が続けば、何年か後には処理できなくなる現状にあります。先般テレビを見てみると、一家庭に出るゴミの量は一日に二キロ

グラムだそうです。缶・ビン・トレイを除き、分別すると、二百グラムしか搬出がないと放映していました。我々の家庭でも、処理できるゴミは処理し、また、リサイクルできる物はリサイクルすれば、ゴミの減量ができます。このことは資源愛護にもなり、また、焼却費の軽減にもなるのです。

現在は物が豊富にあり使い捨てる時代ですが、国民一人ひとりが、資源愛護のためゴミ減量化を考え、活動を推進せねばならない時代であると思います。子供達の為に、

将来住みよい国とし、市町村となる様にすることが我々大人の義務であると思います。今後は、行政がゴミ減量化、資源のリサイクル活動に、住民と共同で推進しなければならぬと思います。我々も、住民への啓発運動を推進し、また行政も進んで、ゴミの減量と資源のリサイクル活動の啓発運動の輪を各地区に広げていかなければ、掛声だけでは住民は行動を起こさないと考えます。資源を大切に使うのはもちろん

ですが、ゴミ減量は、製造メーカーも商品を販売する以上、後の始末を行政や住民に処理させるだけではないでしょうか。製造販売する以上、後始末までの処理を製造メーカーは考えねばならないと、我々は痛切に思っています。行政は、製造メーカーに対して政治的な働き掛けをしてほしいものです。我々の校区でのゴミ減量、及び資源リサ



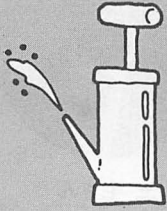
ポイ捨て防止啓発

イクル活動の一環を書きましたが、最後に、我々一人ひとりが資源リサイクル、ゴミ減量化を考えて行動を表現せねば、地球の環境保全には、最悪の時代が早くくると思っています。

特集 暮らしと環境

ゴミと雑排水から生活環境を考える

特
集



合併処理浄化槽に魅せられて

(生活雑排水を浄化して 美しい生活環境を未来に…)

小松町役場 久米敏幸

◆ はじめに

小松町は愛媛県の東北部、周桑平野の東南部にあり、西日本最高峰の霊峰石鎚山に抱かれた自然と文化に恵まれ、そして豊かな地下水にも恵まれた農村地帯である。

◆ 豊かな地下水で企業誘致

この豊富な地下水のため、小松町の上水道は全てこの地下水の汲み上げによって賄われ、一万住民のほとんどの世帯に供給されている。さらに、この豊富な地下水があるがために、昭和四十五年には清涼飲料水製造の大手メーカーである四国コカ・コーラボトリング(株)が小松町に進出して製造を開始している。また、平成三年度には、同社の高松工場閉鎖に伴う移転先として再び当町を選定して第二工場の建設に着手し、平成四年十月から同社の製造は全て小松町で行われ、その製品は四国全域に供給されることとなる。

◆ 地下水の水質保全を

この様に小松町においては、住民の生活用水をはじめ、産業用水に至るまで豊富な地下水が重要な

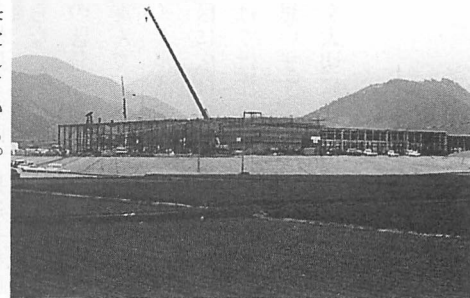
役割を果たしている。

しかし、地下水の水源は石鎚山を取り巻く緑豊かな森林と、周桑平野の水田等からの地下浸透による水により育まれているが、住民の生活様式の変化などによる水質汚濁の進行に伴う地下水の水質保全の確保が問題となってきた。

特に生活雑排水による農業用水路等公共用水域の水質汚濁が急速に進みつつある現状において、その対策が行政の重要課題であると強く認識されはじめた。

◆ 生活雑排水対策として

小松町においてはこの生活雑排水対策として、昭和六十三年度に「下水道整備基本構想」を策定して検討したが、様々な問題が持ち上がり下水道着手は時期尚早と判

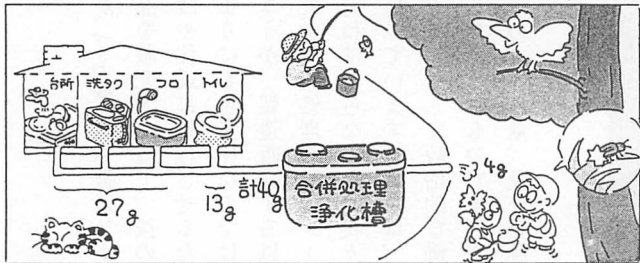


断。これに代わるものとして平成元年度に「生活排水処理基本構想」を策定し再度検討した結果、当分の間はし尿と生活雑排水を併せて処理できる合併処理浄化槽の設置を推進することにより、公共用水域の水質汚濁を防止していくことと決定し、平成二年度より「合併処理浄化槽設置整備事業」に取り組んでいる。

◆ 平成三年度百五十基を目標

そして平成二年度には七十二基を設置し、平成三年度においては

快適な生活と美しい環境をつくる“家庭合併処理浄化槽”



※数値は、1人が1日に出す水質汚濁物質の量をBODで表わしたものと



当初百五十基を計画基数として取り組んできたが、計画を上回る見通しとなった。また、平成四年度の事業については、平成三年十一月に予約申し込みの受付を行ったが、計画基数を上回る申し込みがあり受付を締め切った。

◆ **高かった住民の関心**

合併処理浄化槽に取り組んで、まず感じたことは、住民の生活雑排水に対する関心が意外と高かったことである。トイレの水洗化への要望は高いものの、生活雑排水による生活環境の悪化にまでは関心を示してくれないのではないかと、という不安は杞憂に終わった。

◆ **河川の汚濁を実感**

「昔はこの川で米を研いだり、野菜を洗ったりしていたものよ。」とか「昔は川で鮎をすくうたり、どじょうをとったり蟹をつかまえたりして遊んどったが、今は魚や

か住めんように汚れてしまたけんのう。」という言葉がお年寄りの口から出るなど、普段の生活に密着した身近な川が二十〜三十年程前に比べて、格段の差で汚れていることに、住民自身が痛感していることが伺えた。

この様な思いは四十代以上の住民のほとんどが抱いており、自分たちが子供の頃に遊んだ豊かで美しい自然と、清らかな水が流れ、色々な魚が棲み、そして初夏にはホタルの飛び交う光景を思い浮べるとともに、自分たちの住んでいる現在の生活環境がいかに汚れているかを再認識させる機会を与えることが出来たようにも思える。

そしてまた、このことが小松町での合併処理浄化槽設置推進がスムーズに実施できている要因であると思われる。

小松町では、第一次計画として千基を目標に取り組んでいるが、住民の理解と協力のもと、この計画を一日も早く達成し、美しい自然環境を再現していきたいと思っている。

◆ **県が水辺空間整備事業を**

他方、小松町ではその中心部を小松川が流れているが、この川は土砂が堆積し雑草の生い茂った汚れた河川であった。この河川を愛媛県が策定した水辺空間整備事業に組み入れてもらい、平成元年度より二年間で改修整備がなされ、平成三年度からは新たに「ふれあいの水辺づくり事業」として改修が行われ、最終的には千三百五十メートルが愛媛県によって改修され、小松川は再び住民の憩いの場としての本来の姿が甦ろうとしている。

◆ **縄文後期の竪穴式住居跡出現**

この小松川の改修にあたっては河川敷より縄文後期(紀元前約三千五百年〜四千年前)の竪穴式住居跡三基を主に、炉跡二基のほか約五千点に及ぶ多量の遺物が発見されて話題となった。縄文時代の住居跡は、愛媛県はもとより中・四国地区でもほとんど発見例はなく、また複数が発見された集落として認識できるものの例は、今までにないとのことである。この遺

跡は、小松川遺跡として河川敷内に復元保存されている。

◆ **美しい山河を子供達に**

また、小松川の改修にあたっては、堤内法面に四季折々に咲く約十七種類の草花が植えられているが、改修後においては、鯉・鮎などを放流するとともに、ホタルの飛び交う住民の憩いの場として整備充実していく計画である。

そして、この計画を実現させるためにも、合併処理浄化槽の設置推進による水質の保全向上に積極的に取り組んでいく決意である。

「うさぎ追いしかの山、小ぶなりしかの川……」と唱われるような美しい故郷の再現を願って……



特集 暮らしと環境

ゴミと雑排水から生活環境を考える

特
集



私達の石けん作り運動

宇和島市遊子漁協婦人部 梶原涼子

私の住んでいる遊子地区は、宇和島市の南端三浦半島に位置し、人口一千五百五十一人、世帯数三百三十一戸うち組合員数二百九十三人の養殖漁業を主体とした純漁村で、リアス式の小さな入江の奥にしがみつくようにして、八地区に分かれ人が住んでいます。リアス式の半島ですから、山がすぐ海に迫っていて平地が無く、耕地の狭い所です。当然海に依存した生活が営まれてきました。遊子地区は、古来よりイワシ網漁業が盛んな地区で、江戸時代から、明治、大正、昭和と受け継がれ、昭和三十五年を境に養殖漁業へと転換するまで基幹の漁業でした。盛況だったイワシ網漁業も過剰投資や、漁価の低迷等により昭和三十五年に文字通りつぶれ、海で生活する遊子地区は、壊滅的狀態でした。

その後、混乱のなか養殖漁業への転換を進め、養殖が基幹漁業として定着し、おりからの高度成長期にも便乗して、現在では、年間八十億円を水揚げする一大養殖産地となりました。

しかし、繁栄のツケは大きく、美しかった海も赤潮の発生する海となり、精魂込めて育てたハマチを大量に殺してしまいました。

この赤潮発生、ハマチ大量死を機運に、環境への関心が高まり、海の汚染について地区民全員で取り組む姿勢が芽生えてきました。

その代表的な運動が、昭和四十五年から続いている「海の清掃運動」です。この運動は、毎月一回の公休日を利用して、地区民総出で行います。

そして、合成洗剤追放運動ですが、赤潮発生のメカニズムを勉強する中で家庭排水である自家汚染も赤潮発生の原因であると分かり、合成洗剤を追放して石けんを推進しようという運動を、漁協、農協が中心となって拡めてきました。

私は、遊子に嫁ぐまで別段有害だとか思わず合成洗剤を使っていたのですが、遊子に来て、地区全体



で合成洗剤追放の運動をしているのでびっくりしました。

当時は、よく勉強会が開かれていて、スライドを見たり、実験をしたりしていくうちに改めて合成洗剤の恐さを知りました。

でも、今まで合成洗剤を使っていた私が石けん慣れるまでは大変でした。

洗濯用では、臭いや泡立ち、黄ばみで苦勞し、台所用では、ヌルヌルしていて油がなかなか取れないような気がして、とても気持ち悪く、シャンプーは、洗った後ゴワゴワして、フケが出てとても恥ずかしかったことを思い出します。

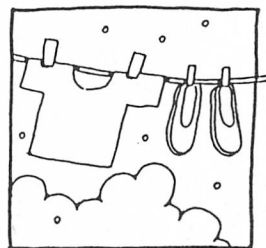
しかし、洗剤も改良が進み、とても使いやすくなっています。



そして、新たな婦人部の取り組みが、「手作り石けん」です。

私達は、手作り石けんに取り組んで、まだ日は浅いのですが、先輩の方々が内海漁協婦人部へ出向いて作り方を指導して頂き、役員の方が見よう見まねで作った石けんを部員に配布しました。初めて見る石けんは、正直言って、本当にこれで汚れが落ちるのだろうか？と心配でしたが、試しに使用した石けんは、運動グツ、換気扇等びつくりするほど汚れが落ち、あたかも汚れがすぐ落ちるような宣伝をしている合成洗剤なんか比では無い洗浄力でした。

この石けんは廃油を利用して作るため、廃油の処分もでき今まで捨て場に困っていた廃油を有効に利用できるし、苛性ソーダの値段も安く、安価で安心して使える石けんです。昨年は、九月二十五日に、百十名の部員で石けんを作りました。石けん作りは四年になりましたが、年々参加人数も増えてきていますし、石けん作りの場では楽しい会話もはずみ、部員の親睦



も深められ有意義な場ともなっています。また、婦人学級や個人でも作るようになり、次第に石けん作りの輪が広がっています。

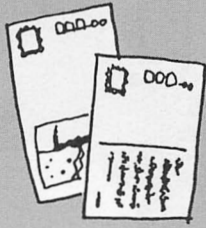
遊子でこれほど手作り石けんが広がったのは、ほとんどの人が海を生活の場としているからだと思えます。私達にとって海は営みそのものだからです。水道の蛇口をひねり水を出すと、流れ出て行く所は海であり、食事の洗い物、洗濯、お風呂など、排水は全て海と

連なっています。最近よくコマースナルで自然保護を訴えています、改めて自然は無限ではない、有限である事を私達は忘れてはいけないと思います。

宇和島ブロック漁協婦人部でも石けん推進に力を入れています。

フリーライターの前瀬先生を、お迎えして、「石けんシンポジウム」を、昨年、一昨年と開催致しました。その後、宇和島市役所内でも合成洗剤追放が行われました。一般の方々の反応は、すぐに石けんという訳にはいきませんが、少しづつでも石けんの輪が次第に広がっています。この輪が一層大きな輪となっていくことを願い、今後も自分達に出来る運動を地道に続けて行きたいと思えます。





“捨てればゴミ、生かせば資源”

を合言葉に活動

えひめ生活センター友の会会長

八幡浜市 上村 喜佐子

えひめ生活センター友の会では、地球環境問題への意識の高まりの中で、「限りある資源を大切に」「捨てればゴミ、生かせば資源」を合言葉に、くらしの中の省資源問題啓発事業の実践活動を進めて参りました。

まず、針葉樹を原料とした丈夫で良質のバルブで出来ている牛乳パックが使い捨てにされ、ゴミ増量の一因ともなっている事から、ゴミの減量、そして資源化を呼びかける手だてとして、楽しみながら誰にでも出来る手すきハガキ作りに取り組み、意識の啓発に皆様のご協力を呼びかけて参りました。

県や市町村で行われるイベント、地域での学習会、幼稚園、学校、老人会など各方面からの問い合わせやご要望もあり、出前教室なども行った結果、関心をもってくださいる方々も少しずつ増えております。このような折、野村町の精神薄弱者更生施設から、「リハビリを兼ねて創作意欲を高め、物を大切にすることを育てる目的で、このハガキ作りをしてみたい」と要望があ

り施設へ出向きました。

二十歳から六十歳くらいの男女園生三十名に対し身振り手振りと言葉を選びながらボランティアの方々にも助けられて、ハガキ作りを実施しました。

そうしたご縁で、その後も先生方とお便りの交換をしておりますが、それによると園生の日常生活に、物を大切にする心が見え始め、ゴミ箱に捨てる前に小さな紙切れ一片でも「先生捨ててよいですか」と確かめたり、給食の二〇〇CC入り牛乳パックを持ってきて、「これ使ったら」などと言っているそうです。

園の文化祭には、ハガキも販売できるようにになりました。

このことを知って、多数の保護者や地域の方々から、牛乳パックが持ちよられるようになり、回収の窓口が一つ増え、省資源の意識が芽生え始めたように思われます。このことがきっかけになり、地域の産業まつり、文化祭などへハガキ作りの実演に出かけることも多くなり、小学生やお年寄りにも

楽しみながら、ゴミ減量やりサイクルを考えていただくきっかけもなっております。

たった一日のハガキ作りの出会いから、園生や地域の皆さんに芽ばえた「限りある資源を生かすための省資源意識」これが私たちの願いであります。

「言うは易し、行うは難し」されど「やってやれないことはない」。ささやかな実践活動でも大きく輪



手すきハガキ作り



上村さん

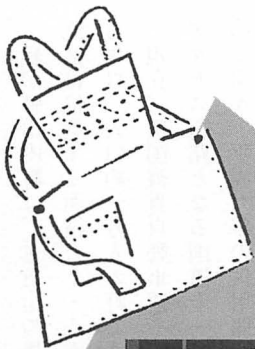
が広がることを願いながら、一時的ブームに終わらないように、昨年五月三十日の「消費者の日」のついでに(各地域から三百余名参加)の場で、リサイクル教室オープンングセレモニーを行いました。その後も、女性総合センターで奇数月の最終木曜日の午前と午後二回、リサイクル教室を開催したところ、年間六回で延べ五百十一名の参加者がありました。

参加者の中には、伊予農業高校の女生徒八名の飛び入り参加や二十名の団体、役場の職員の方などがおり、それぞれの立場で熱心に受講されました。

この教室はお遊びとしてのハガキ作りが目的ではなく、省資源問題意識の啓発をする手だてとしてこれをとりあげていることを伝え、地域へ輪を広げていただくように

お願いしました。

参加者は、「牛乳パックがこんなステキなハガキや小物入れになる」とは、「アイデアでくらしに役立つものができるよい資源をゴミにしていたことを反省、これからは回収にも協力しなければ...」ゴミの中に牛乳パックが以前ほど見ら



リフォームえぶろん
ファッションショー

れなくなつたし、空缶の散乱も少なくなつた」など、一歩前向きのうれしい声も聞こえてくるようになりました。

また、「捨てる前に考えてみました。私のリフォームえぶろん」と題して、会員が百十一点のエプロンを製作し、ファッションショーを行い、啓発しました。

古いワイシャツ、タオル、浴衣、ワンピースなど、タンスにねむっている古い衣類が立派なエプロンに生まれかわりました。

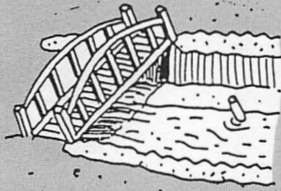
ゴミにも生命があります。分別回収、リサイクルできるものを、捨てる前にもう一度工夫して使う気運を盛り上げることが、会員一人ひとりの使命だと思います。

せっかく分別回収に協力しても、再生品のトイレットペーパーその他グリーンマーク、エコマーク商品を使わないなど、まだまだ問題は山積みしています。

買物には袋を持って出かけ、過大・過剰包装にも関心をもち、ムダな包装を断る勇気も大切な行動です。

特集 暮らしと環境

ゴミと雑排水から生活環境を考える



環境美化フォーラム '92

川内町役場 大西 裕



大西さん

我が町川内町は、重信川の最上流部に位置する面積百十・八六平方キロ、人口約一万人の町です。現在、四国縦貫自動車道やそのアクセス道路となる国道十一号線の工事が、平成六年の供用開始を目指し最盛期を迎えようとしています。

町を流れる川は、重信川の支流の表川、宝泉川、渋谷川、井内川と道前平野へ流れる中山川の支流滑川があり、平野部には農業用の水路等が、網の目のように張り巡らされています。

昭和四十年代以降、我が国の経済成長と共に、これらの河川は護岸整備が進み、中小の農業用水路はコンクリートで固められ次第に潤いを無くし、また我々の生活水準の向上につれ各家庭から流れる生活排水によって川が汚れてきました。

振り返ると、現在四十才代位までの方の子供の頃の夏休みの遊びは、川の澱みで泳ぎ、そして鮎、鰻、鯉等の魚を捕ることでしたが、今では子供達が川で遊ぶことは学校で禁止されているようで、子供が川で遊んでいる姿は全く見かけなくなりました。

今の子供達は完全に水辺から離されています。

これは、子供の安全のための配慮でしょうが、川が汚れ魚も少なくなつて川の中に入る気持ちが悪くなくなつたことも一つの原因だと思います。

しかし、慣れとは恐ろしいもので、今ではこのような状況は当然のことと誰も不思議には思いません。ほんの少し前であれば、これとは反対に川に入らない子供がいたら不思議に思われていました。

このような環境の悪化について行政と住民とがどのように共同して、自分達のふるさとの豊かな自然を守り次の世代に引き継ぐか考える機会として開催したのが、M

Y TOWN かわうち 環境美



記念講演
「私の自然との付き合い方」
登山家 今井 通子さん

化フォーラム'92です。

フォーラムには、約三百人の参加者があり、三時間三十分余りにわたり、講演とディスカッションを行いました。

参加者からも多くの意見が出され盛り上がりましたが、結論は次のようなことでした。

行政は、環境を守るため住民の

MYTOWNかわうち環境美化フォーラム
河川美化と生活排水対策を考えよう



意向も踏まえた水質浄化の計画を立て、住民への啓蒙を図り住民の協力を得ながら下水道整備などを進め、住民は住民として環境に対する認識を十分に深め生活に気を付け、また、子供達には水に親しむ機会を与え、環境に対する教育も小さい頃から進めることが子供のふるさとする意識も深める

ことになり、今後のまちづくりにつながるものとなるということでした。

ただ、この問題を考える場合に最も大きな問題は、直接自分の利害に関わりがないため、知識としては十分知っていても、行動に結び付かないことです。これをどう社会のシステムに組み込むかが問題解決の鍵となるように思います。具体的な方向については別の機会に譲り当日資料として使用した小学校六年生の作文を一つ紹介し環境美化フォーラムの紹介を終わります。



て	れ	く	ま	そ	に	ろ	や	め	く	か	け	き	な	の	く	ば	任	境		
い	ば	な	こ	え	は	川	う	か	な	。そ	れ	か	な	の	の	、私	で	が	私	
く	環	っ	の	ば	、一	内	か	な	る	。そ	ば	な	な	困	で	環	は	壊	地	
の	境	て	川	大	、最	町	。	気	と	し	な	な	く	つ	は	境	の	れ	域	
で	が	い	内	き	初	の		持	、住	、な	は	ら	い	な	も	一	い	て	の	
は	少	く	町	な	の	環		ち	に	な	は	ら	る	い	少	で	し	住	環	
な	し	に	か	差	の	境		に	来	川	、	な	そ	で	し	人	し	ま	境	
い	ず	は	ら	が	一	を		な	た	内	て	一	い	う	し	一	よ	う		
だ	つ	、	、	で	歩	良		る	人	町	い	人	け	音	よ	人	う	の		
ろ	で	今	早	き	が	く		の	は	か	く	一	ど	な	う	が	か	は		
う	も	か	く	る	お	し		で	と	人	ら	の	、	は	。	く	私	川		
か	良	ら	ゴ	。	く	て		は	な	々	ゴ	で	が	は	、	な	た	内		
。	く	実	が	れ	大	い		な	い	さ	、	が	な	は	、	な	ち	町		
	な	行	が	て	切	く		い	だ	わ	初	な	を	な	な	付	の	環		
	っ	す	な	し	だ	の		だ				あ	あ	か	い	れ	責	環		

“夢”創造“未来” 魅力あるふるさとづくりを求めて 「まちづくり草の根文化講演会」

近年、全国各地で地域の活性化に向け、地域の資源を活用した特産品の開発、各種まちづくりイベントの開催、そして特産品センターの建設など、ハード・ソフト両面から様々な「まちづくり、むらおこし」事業の試みがなされています。

しかしながら、「まちづくり、むらおこし」活動を取り巻く社会環境は、まちづくりの核となるテーマの選定、地域住民の意識の問題や活用資源など、検討・解決すべき問題が山積しているのも事実です。

そこで、(財)愛媛県まちづくり総合センターでは、地域固有の歴史、生活文化に裏打ちされたまちづくり活動の原点を探り、个性的で独

創的な活力と潤いのあるふるさとづくりを進めるため、まちづくり先進地の実践者等を招いて、「まちづくり草の根文化講演会」を県内三市町村において開催いたしました。ここで、簡単にその内容をご紹介します。

◇東 予 地 域

日時 二月十五日(土)

場所 丹原町福祉センター

東予地域では自然にはぐくまれた田園と文化の町、丹原町で、地元の方をはじめ近隣地区から百二十名の参加を得て開催。講師の田

村先生からは、「元気アップ茂木」のまちづくりについて、実践事例や体験談を交じえ大変親しみのあ



る話をしていただき、大変元気づけられ何か自分達が気軽にやれる、ひと汗かいてみようという気持ちにさせられた講演会となりました。

「ひとが支える

協働のまちづくり」

栃木県茂木町商工観光課課長補佐

田村 幸夫

町は、過疎の指定を受けている

が、町の人や町職員が非常に元気である。この元気が茂木の自慢の一つ。また官民一体となったまちづくりをしているのも大きな特徴である。それは大水害を克服するための行政と民間が共に汗を流したことにより培われたものである。

百年後に、元の様な風情のある川に甦らそうとする川づくりや、廃屋を利用し個人的な人が集いユニークな運営で知られるまちづくり勉強会「農村出会い塾」など協働のまちづくり活動について紹介。

そうしたまちづくりの素地は、自分達の子供が将来この町に住んでくれるだろうかという危機感から出発。仲間づくりから、一つの運動として展開できる体質を作り上げてきた。まちづくりは、特別な事をやるのでなく身近な事を一つひとつクリアして行くことである。「自分達の町は自分達でつくろんだ」という意識が大切であり、気がついたときに始めるのが適齢期。子供達に胸をはって譲り渡せる感動的な地域を協働でつくって欲しい。

◇中予地域

日時 二月二十八日(金)

場所 伊予市民会館

中予地域は、あいにくの肌寒い雨模様にもかかわらず、伊予市地元を初め近隣地区から百四十名の参加のもと、講師による含蓄のある、しかも先進事例を紹介しながらの解かりやすい講演会となりました。

「地域に根ざした

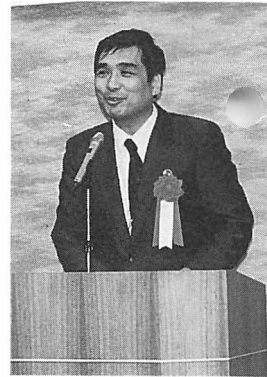
活力あるふるさとづくり」

(財)滋賀総合研究所主任研究員

織田 直文

人間に、もつと良くなりたいたいという向上心や人格があるように、町も未来のビジョンに向かって求めていかなければ、本当にいい町、豊かな町にはならない。

また、私たちの暮らし、仕事、事業は必ず規定演技と自由演技(基本と応用)の二面性を持っている。独自性の強い施策を通して、町づくりの個性化を図るものが自由演技型といえる。



今後は、自由演技のまちづくりが重要となってくる。その背景としては、

①地域の競争の時代

国策として地域で色々なアイデアを競わせて優秀なものを吸い上げて、それをモデルにしようとしている。いわゆる「まちづくり戦国時代」

②人の心の問題

昭和五十二年頃から、物の豊かさから心の豊かさへ価値観がシフトしてきている。これは「自己実現の時代」といい、自分の生きざまを真剣に考えていこうという思想が重要視されている。

③宇宙への貢献

経済活動、社会文化の国際交流が盛んになり、環境問題も国際化して完全に地球がムラ化している。従って、グローバルな視野と発想が必要である。

◇南予地域

日時 二月二十九日(土)

場所 宇和町文化会館

南予地域では、昨年十二月に完成したばかりの宇和町文化会館に、地元宇和町をはじめ近隣地区から約百二十名の参加者を得ての講演会となりました。地域資源である歴史文化を活かしたまちづくりの手法などについて含蓄のあるお話をいただきました。

「歴史文化に根ざした

まちづくり」

(財)鉄の歴史村地域振興事業団専務理事

藤原 洋

吉田村で大正末期まで続いていた、たたら製鉄の歴史を復活し、鉄の文化を活かした地域づくりをやりうと取り組んだ実践事例を中



心にわかりやすく、具体的に話していただきました。

情報・知識・サービスの三つが都市にあるため若者は都市に集中する。また「文化的充足感がない」「楽しい消費の場がない」「他の人が極端に私生活に干渉する」という田舎が嫌で都市へ集中する。

現在の地域づくりで成功するところは五年後には5%も残っていないだろう。なぜなら、「何の為の地域づくりなのか」ということが明確でない」「計画が深く考えてつくられていない」「実践にあたっての戦略的な発想がない」からである。そんな中で行政は非常に重要な位置を占めている。

現在、新しい地域づくりの方向性として、人材開発という面が出てきている。その為には、「人を育てる環境をつくること」「人や情報の集まる職種をつくること」そして何よりも「自分づくりに懸命になること」が重要であり、それは、五十年、百年といった非常に長いスパンで、しかも一生懸命やっていくことが大事である。

まちづくり見聞録

INヨーロッパ

(財)愛媛県まちづくり総合センター研究員)

御荘町教育委員会 山岡

強

ウィーン
(オーストリア)
の巻

◆ 百聞は一見にしかず

現在ヨーロッパでは、EC市場統合へ向けて、各国とも地域産業の開発に熱を入れている。市場統合が実現すれば、経済的には国境が消えてしまう。そうなれば地域間の競争は激化するし、各地域の相対的な位置に変化が生ずるであろう。

この揺れ動くヨーロッパに向けて、私は、公職研(公務職員研修協会)によって企画された「まちづくり総合コース」の研修へ参加し、ヨーロッパの三都市(ウィーン・パリ・ロンドン)におけるまちづくりの現状を、この目で確かめるべく日本を出発した。何かと情報の氾濫しているヨーロッパ。その現実の姿とは、一体どのようなものなのだろうか…。

◆ 一路 音楽の都ウィーンへ

二月五日、全国から集まった我々公務職員一行二十九名は、成田空港を後にした。

それにしても、モスクワ経由とはいえ所要時間十三時間半、ただ座っているだけのオーストリア航空機内で、機内食三回というものにも胃がもたれた話だが、前方左に見える、沈むことのない太陽をただひたすら追い掛け、眼下に広がる真っ白なシベリア大陸を望みながらの飛行は、何かそれだけで感動ものであった。

ウィーンに着いたのは同日夕暮時、とはいえ時差は日本と比べてマイナス八時間。それから長い夜の始まりであった。

♥ウィーン市の都市開発と保全
ウィーンでの研修テーマは『まち並み保全と都市計画』である。

二月七日、ウィーン市役所都市

計画課を訪問し、都市開発の現状についてレクチャーを受けた。

■ 歴史的古都の居住環境

ヨーロッパの古都ウィーンでは、現在、都市開発と歴史的建造物・街区の保全が大きな問題となっている。かつては、日落つることなき帝国を形成したハプスブルク王朝の帝都として、中世以来の歴史的遺産に包まれたウィーンも、今日では市内の約二十六万七千戸の住居が緊急に改良を必要とする状態に置かれている。

住居の設備の低水準・老朽化・過密など居住環境の悪化は、旧市街部において目立ち、全体で見ても、六二%は建築後四十年以上、五〇%は六十五年以上を経ている。低所得・高齢の市民が住む地区や、地主が改良のための経費を渋る地区では、強力な公的介入が求



再開発中のアパート



再開発されたまち並み



ウィーンの美しいまち並み

められているのである。

■ 都市再開発のための諸制度

オーストリアでは、再開発事業に基づいて個別的な経費の許容基準を採用している。このため、再開発の費用が新築よりも高くつく場合には、所有者は建物の取り壊しを要求することができる。また歴史的建造物・街区の概念も厳密に定義されたものではなく、一定の目安にとどまっており、個別のケースに適用するときは困難を生じることがある。しかし、緊急に保護・保全されるべき歴史的建造物・街区は多く、関係法の改善が必要となっている。州によっては建築基準法のほかに歴史的建造物・街区保全法を有しているが、ウィーン州は法律を定めていない。このように、現法制と現実とのギャップを埋めるために、各地域は独自の規則を制定して、本来は連邦の仕事である歴史的建造物・街区の保全に対処しているのである。

■ ブルートガッセ地区の事例

再開発を緊急に必要としている地域は多いが、ウィーン市は都市

再開発を「小さな積み重ねの大事業」と認識し、決して拙速には走らない。再開発地区が決定するとまずその地区をどのように再開発すればよいかプランニングを公募し、その結果によっては市の素案を廃棄する。住宅地区では居住条件の向上、公園や児童遊園・駐車場の設置、緑化など地区全体の生活環境改善がすすめられている。その場合も、建物全体を取り壊すことはなく、基本的な外形は残しながら外観を整え、内部の近代化や部屋数の増加などで居住環境を改善している。

再開発の重点として、既存ビルの特徴や歴史的価値に配慮しながら、住居や店舗を増やして活気ある近隣住区をつくること、屋根のデザインを調整し、あるいは高いビルを低くして採光や眺望条件をよくすることなどが行われているのである。

日本においては先ず破壊から始まる再開発に対して、ウィーンはその建造物の歴史・外観等を非常に大切に考慮する、言わばリハウス、リフォーム的発想が主流。何

百年もの歴史に育まれ、常にリフレッシュを繰り返す町並み・景観の美しさに驚くばかりであった。

とにかく、我が国との開発または再開発に対する基本的な考え方や理念に大きな相違が見られた事は事実であった。

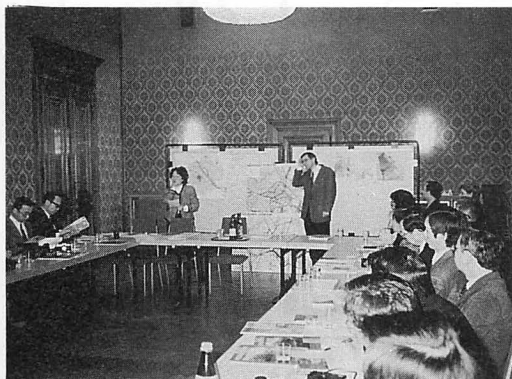
◆ 心安らぐ間もなく…

ウィーンの森からウィーン市内を見下ろすと、中央にドナウ河が流れている。その河中を、中洲のように横たわるドナウ・インゼルは堰堤兼用の人口島で、面積三百ヘクタール、長さ二十一キロメートルに及ぶ細長い島である。

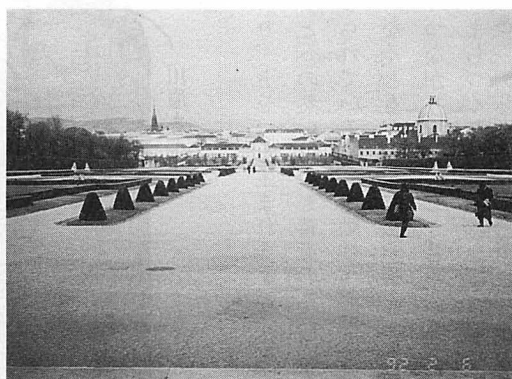
オーストリアは内陸のため、水に親しむ空間がなかったが、この開発により、市民のレクリエーションや休暇に対する概念が変わってきた。そして、この水辺の緑地の鮮やかさが、ウィーン市全体に潤いとゆとりを与えているようにさえ感じられた。

翌日、一行はそれぞれの思いを胸に、次の研修地パリへと向かった。

(次号へつづく)



研修の様子(ウィーン市役所にて)



とにかく広い公園が多い



文化のかおる町づくりを

東予市 川原 光明

私がUターンしてから二十二年がたった今、ふるさとで第四回目の「ふれあいコンサート橋口貴恵子フルトリサイタル」に取り組んでいます。昨年七月に第一回目の「日和佐歩ピアノリサイタル」、ドイツのクレメンテ・トリオの「ピアノ三重奏」、小室等さんのおしゃべりコンサート「しがらきから吹いてくる風」と、今回で四回目を迎えます。毎回四百〜五百五十名の参加者で、中央公民館は熱気と感動で満まっています。これらのコンサートで重要な役割をしているのが「ふれあいコンサート実行委員会」(略称ふれコン)です。私は、ふれコン実行委員会の発足に至る経過を話したいと思います。それが、東予市の草の根の文化活動の歴史であるからです。

十年前の昭和五十七年(一九八二年)に、原爆記録映画「にんげ

んをかえせ」こどものころ戦争があった」の上映会を行い、一千名を超える市民に鑑賞していただきました。「すばらしかった」「涙が止まらなかった。感動した」「また、いい映画をやってほしい」等々の声に、私たちの疲れは吹っ飛んでいき、手をとり、肩を抱き合い感激を共有してきました。趣意書、チラシ、チケットを持ち、あらゆる団体、個人、学校で話し合った回数は百回を超え、多くの方々と出会いました。切れていた糸が、一つひとつ結び合い、一本につながれてきた感じでした。この年の秋に、東予シネ・サークル(兵頭忠治代表)が発足しました。現在まで名画を中心に二十八本上映してきました。「こんにちはハーネス」では身障協と、「はだしのゲン」では被爆者の会と共催、「ブリキの勲章」では、婦人会、PTAに

参加していただきました。またこの間に、わらび座公演二回、文化座公演、映画と合唱の集い「母さんの樹」、市内七文化団体による子どもフェスティバル、きたがわてつコンサート、平和コンサート等々……。

鑑賞者は延べ一万六千人を超えており、これは東予市の人口(三万四千人)の二分の一弱にあたります。

このような活動の中で、私の元塾生であった新進気鋭のピアニスト日和佐歩さんから「東予市で発表会をしたい」との相談があったのです。仲間を声をかけると、中央の有名奏者もよいが地元出身者の音楽を聞こう」「地元出身の音楽家を育てよう」「東予市の文化向上になるぞ」等々の意見で「ふれコン実行委員会」が誕生したのです。私たちは、クラシック音楽には素人ですが、当日の進行まで全て手作りの企画です。

映画館、文化ホールのない町ですが、一つひとつコンサートに取り組み中で、ふれあいの輪が広が



川原さん

り、ドラマも生まれます。ふるさとへの熱い思いと善意のみに支えられてこの活動は、派手さはなくとも、大地に根を張り、人のつながりを回復し、暮らしやすいまちづくりの一助になると信じています。

今回は、古墳発掘で活躍されている松山市の十亀幸雄さんです。



新しい町づくり

JFマーケット構想

松山市 白石 雅也

……リレーでちょっとク……

昨年の蒸し暑い梅雨の午後。松山市の近くで大規模農法に挑戦中の青年M氏とコーヒーを飲みながら、悪戦苦闘の現代農業から抜け出し、明るい農業を再構築する夢物語をぶっていた。

そのとき、いまの県下では、各地域から選出された役員ヤングファーマーの間では、よく交流がある。しかし、ごく一般的なヤングファーマーどうしの意志の疎通はあまりない。ましてや、情報社会でいちばん大切といわれているファーマーと消費者との交流などほとんどなく、そのチャンスさえもない。これでは消費者ニーズを取り入れた次代の愛媛農業の再構築はかなり難しいという意見に一致した。

では、どのようにすればよいのだろうか。具体策としては、とてつもなくでっかい市場をつくり、そこに県下の生産者と消費者とが集まり、生産物の売買を通して、互いにコミュニケーションを深めたらというアイデアに達した。

そこで、コーヒーの香りに誘われて、JFマーケット構想が浮かんだ。この市場は日本の農業生産者が組織する市場という意味で、場合によっては、ネーミングはEFマーケット（愛媛農業生産者市場）でもよいと思う。しかし全国レベルで愛媛県が最先端を走るということをやねらうならば、JFマーケットの方がよいだろうということになった。このマーケットは二十から三十ヘクタールとジャンボ級で、敷地内に広大な無料駐車場をも設け、全県下で採れる農産物が毎月二回程度集まる。

陳列される品物は、自分たちが生産したもので、それらは全くセーフティ（安全）で、フレッシュ（新鮮）で、しかもヘルシー（健康）な農産物であることをパンフレットや口コミによって消費者に徹底的に認識してもら

う。それと同時に生産者にはそれぞれの消費者のニーズを正確に理解してもらうことがマーケットの大切な役目となる。

このマーケットに出店される品目は生鮮野菜に限らず、県下で生産されるコメ、ムギから畜産品、花、果物、魚、木竹皮製品、そして加工製品（特産物）までも含む。さらにマーケット内には、ウドン、ラーメン、ハンバーガーや日本・西洋料理を食べることができる店も設定したい。

市場をダイナミックに演出するためには、県下のお祭り広場、小動物とのふれあい広場、フルーツやフラワー広場、ヤングが喜ぶハンングライダーやモトクロス広場、夏はプール、冬にはスケート場に変身するジャンボプールなどを付設し、さらに、秋から春にかけては入場者の休憩の場となるジャンボ熱帯植物ドームも欲しい。

このジャンボマーケットではヤングファーマーが主体性をもって、企画運営する。しかし、終始、愛媛県、市町村、さらに農協団体などの協力が必要なことは述べるまでもない。

こんなに広い市場だから、当然県下のあちこちから生産者や消費者が集まり、情報交換に打ってつけとなるだろう。さらに、このマーケットは県民に限らず、松山を訪れる観光客にも強くアピールし、旅の一刻を瀬戸内の空のもとで、ヤングファーマーと一緒に楽しんでもらう。したがって、愛媛県民はもとより、全国にわたってたくさんの方々の友達ができ、最高の農村支持者が生まれることになる。

当然、ファーマーは生産・販売の喜びを自覚でき、このマーケットは企業のセンスを持った農家の育成支援システムとして、最高の機能を発揮することになるだろう。

なお、この構想の骨子は、愛媛県生活文化推進懇談会で、地域づくり部門から提言され、昨年の十二月十日（火）の愛媛新聞紙上に紹介されている。

次回は、世界料理オリンピックなどで、数々の賞に輝いておられる松山市の門田征吾さんです。

元

氣

印

し

ポ

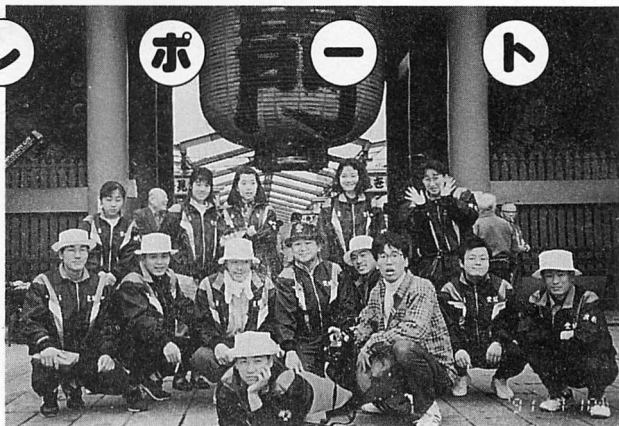
一

ト

年間活動日数 365日

大洲市新谷青年団団長

うばがい
祖母井 章



昨年十一月に東京で行われた第四十回記念全国青年大会演劇の部に我々新谷青年団は、愛媛県代表で参加しました。全国各地より、二十五団体が集まり、演技、舞台美術、脚本などを競い合いました。大会二日目の十一月九日「君子の自転車」の出演を終え、翌日十日がいよいよ結果発表です。

まず優秀賞の発表があり、我々は、最優秀賞を目標にがんばってきたので、優秀賞になれば最優秀賞はもらえないし、ここで呼ばれなければ、何ももらえないかもしれない。この時ほど複雑な気持ちになったことはありませんでした。優秀賞の発表が終わり、続いて、最優秀賞の発表です。「最優秀、愛媛県大洲市新谷青年団、君子の自転車。」その瞬間、ぼくは立ち上がり、ガッツポーズで飛び跳ねていました。抱き合って泣いている女子団員もいました。念願の青年大会での「日本一」を受賞したのです。

なぜ、新谷青年団は、演劇日本一を目指してがんばってきたのか。

事の起こりは、昭和六十三年度の全国大会初出場の時でした。

新谷青年団では、毎年二月頃に演芸会といって、踊りや歌や劇などを中心に、地域の方に楽しんでもいただくという行事がありますが、これは今年で四十一年目と長年受け継がれてきた行事の一つです。

この演芸会の中の演劇のレベルアップを図って、県大会に出場したのが六十三年度、その時、まさかの全国大会出場となったのです。その晴れ舞台終了後、審査員の講評を聞いて皆がっかり肩を落としてしまいました。自身をもってその場にいどんだわりには、講評は最低で、ほとんど審査対象外といったところでした。その時ほど皆悔やしい思いをしたことはなかったでしょう。でも今にして思えばこの悔やしく思ったことがきっかけであり、我々の原動力でもあったのです。悔やしさからの出発で三回目の全国大会、最優秀賞と合わせて、脚本賞と、優秀舞台美術賞もいただくことができました。皆それぞれに、一生の思い

出となったことでしょう。

青年団活動が停滞しているといわれる現在、なぜ新谷青年団がこんなに盛り上がっているかというと、ここ数年、新谷青年団のOBの久保さんを中心とした、この演劇活動が原因の一つだと思います。

今年度団員数十五名、OBと市内青年団の協力もあり全員で二十名程度の人数での活動でした。しかし、実際毎日参加できる人は十名程度でしたので、準備などは、役者とか関係なく、全員で取組んできました。

全国青年団大会 最優秀賞
「君子の自転車」の一場面





人が集まり、共に語り合い、共に活動していくということは、お互いに理解を深め、良い所を見つけ、それを生かして、伸ばしていくという、人間教育の場となります。人間は、十人十色、百人いても一人として同じ人間はいません。

しかし、今の世の中は、没個性の人が多い、また自分の意見や個性を生かす場が少ないようにも思えます。そこで、青年団活動を通じて、それぞれの個性を生かし、同時に、協調性や責任感を養っていきけるのです。

青年団とは、何かをする為に集まっているのではなく、集まる為に何かをする集団だと僕は考えます。集まる為に何かをするのであれば、集まる機会が多ければ多いほどいいと思います。新谷青年団

独自の行事が毎年約十五〜二十程あり、また市の連合青年団での行事や公民館関係の行事、その上演劇の準備と練習なども含めますと集まる機会が多いどころか、年間三百六十五日いや、今年は三百六十六日といった感じです。

現在の若者の多くは、青年団活動より、テレビやビデオ、カラオケに車、旅行、スポーツそして恋人とのデートの方が魅力的であり、若者が自ら進んで青年団活動に参加することが難しい状況だし、価値観の多様化に伴い、青年団でどういった活動をすればより多くの参加者が望めるかも判断しにくい状況です。それならどうするか。答えは簡単です。今のメンバーが楽しく、愉快に、生き生きと活動することです。そして、何らかの形でそれをアピールすることです。青年団を暗いイメージでとらえる人が多く、ダサイ人の集まりのようにみられがちですが、実際に参加してみても初めてその魅力が理解できるのです。それから大切なのは、何をするかより、どうい



「ぼくのラジオ」の一場面

気持ちでするかということですが。地域の時代とか、村おこし、まちづくりといった言葉を最近よく耳にしますが、何か大きなお祭のよいうなイベントを考えるのもいいが、まずその行動を起こす前に一人ひ

とりの心を見つめ直さなければならぬと思います。心が動いた後に体が動く、そういった行動が必要ではないでしょうか。

今回の演劇にしてもそうです。青年大会で日本一になりました、というのは、目に見える事だし、耳に聞こえてもきます。しかし、本当に大切な事は、見えるところにはないし、聞こえてもきません。舞台の上ではなく、舞台裏が大切なのです。準備を何一つしない青年団活動では、感動もないし、涙もでません。ましてや一生の思い出など・・・。

演劇活動を通じて、また数々の青年団活動を通じて、人と人との出会い、話し合い、共に活動をして、テレビや映画じゃなく、自身自身がさまざまな経験をし、そこからいろいろな事を学ぶことができました。

今後、我々青年団は、より多くの若者と共に、自分達が生まれ、育ったふるさとを、より楽しく、より魅力的なものにしていきたいと思っています。

それぞれの地域でがんばっている青年団の皆さん、これからも共にがんばりましょう。

元

氣

印

レ

ポ

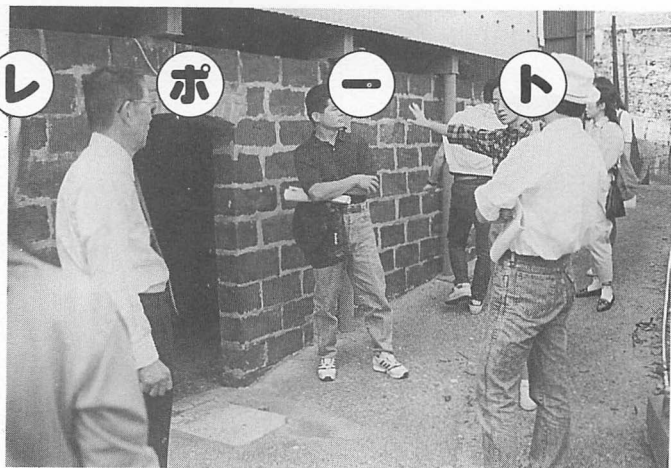
一

ト

第二期ほない鳴瀧塾スピリット

ほない鳴瀧塾塾長

西園寺 賢 一



愛媛蚕種 カラミレンガ



歴史の交流(川之石ドレスメーカー)

「鳴瀧塾」は、我が町保内の偉大なる先人、二宮敬作が志を立て、若くして医学を修めるために長崎に渡り、蘭医学者のシーボルトの門下生となり、鳴瀧塾で学び、現在の宇和町で開業し、医療活動だけでなく、宇和島藩の後進の教育にも熱心に取り組み、藩の近代化、日本の発展に大きく貢献したことにちなんで命名されている。鳴瀧塾は、このような二宮敬作の進取の気性を見習い、保内の将来のリーダーたる人物を育成すること

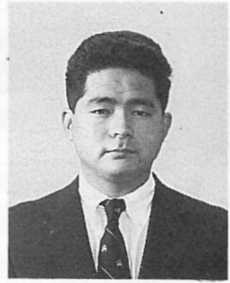
を目的に、二年間の任期に自らがテーマを決め、学習する場である。第二期ほない鳴瀧塾生である私達はこの自由な学習の場をどう活かせばよいか戸惑いながら学習会を重ねている。

この一年間の学習会を通じて、多くの人々と出会い、保内の歴史と町並み、生活環境について教えていただいた。

保内は古くは、海運、ハゼ栽培、木蠟もろうで発展した。銅が産出され、銅山が盛んに開発されるようになると経済的にも豊かになり、明治期から紡績工場ができ、愛媛県で初めて銀行が設立され、四国で初めての電灯がとるなど、二宮敬作の積極進取の気風張り活気溢れる町であったことが想像できる。経済の繁栄は豪商による素晴らしい建物を遺している。それらの歴史的建物の中には、いち早く西洋的建築技術を取り入れた和洋折衷の洋風館があったり、当時洋風建築材として人気だったレンガで作られた塀が残っている。子供の頃、遊んだ路地が保内の歴史を表して

いると知ると、新しい建物だけが良いと思っていた価値観を見直される思いであった。また、保内の活力漲る歴史から今の保内に進取の気風、活力を学び実践することが鳴瀧塾の目的であると思う。

それから歴史的町並みを散策していると気づいた問題であるが、保内は水が豊かで清らかだと思っていたが井戸が涸れたり、家庭から生活排水が流れ出る水路、町の中央を流れる喜木川・宮内川の水が濁り、悪臭が出ていることに気がついた。調べてみると多くの町が河川の水質浄化、環境美化に力を入れて取り組まれていた。私達も講師をお招きして生活排水の基礎知識を学ぶと共に川をきれいにするために生活排水の対策が不可欠であることを知った。現在の保内では、一部の地区では終末処理が行われようとしているが、大部分の地域では下水道整備が計画されておらず、各家庭、団地に合併処理浄化槽を設置して、まずそれぞれの家庭から生活排水をきれいにし、きれいな川、自然豊かな



西園寺さん

な水辺、きれいな海を甦らせなければならぬと思う。

この一年間の学習会を通して、私達は保内の歴史から積極進取の精神を学び、保内の町並みには歴史の遺した大切な財産があることを発見した。また、汚れつつある川を見たとき、個人の便利で豊かな生活の代償に私達の自然環境を悪化させていることに気づいた。

私達第二期はない鳴瀧塾の目的は、保内の地に脈々と受け継がれてきた積極進取の精神で広く世界から学び、自分の住む町を愛し、豊かな自然と調和した現代の生活をゆとりをもって満喫できる町を目指すことだと思ふ。

まちづくり、まちおこしは混同して考えられていると私は思う。まちづくりは、今ある保内をベースに、より豊かで、ゆとりのある生活を営むためにどうすればよいかを考え、より進化した保内を創

造することだと思ふ。その為には本当に必要なインフラの整備——私は保内の瀬戸内海側の地域と宇和海側の地域を隔てる峠を貫くトンネルだと思ふ——と、生活環境を昔の自然な姿に甦らせると共に、現代の生活と調和させるために自分の出来ることを考え、行動し、保内を愛する人を増やしていくことだと思ふ。それともう一つ、これは私の強い個人的意見だが、保内中学校に保内町中の中学生を集め、多感な青春期の三年間を共有し、大人になった時、保内を愛し、友人として互いに信頼し尊重し合える人間関係を創造できれば、これほどすばらしいまちづくりはないのではないかと思ふ。小さな保内でさえ峠を隔てたり、地理的に離れているだけで地域工ゴに陥り、本当に保内の将来の為に正しい選択が出来ないこともあるように感じる。まちおこしとは町外に観光やイベントを通して我町をアピールすることが第一目的で、日々の暮しの豊かさに結び付けるには、一朝一夕に起こされた



高知県中村市 トンボ王国での研修

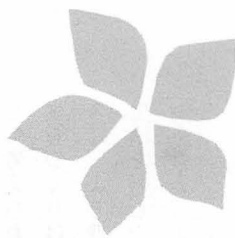
ものでは無理があると思ふ。たとえ他の地域に出かけた時、保内という町名を人が知らなくても、保内を愛し、そしてその地域のすばらしさを受け入れられる人づくりがまちづくりだと思ふ。

今、第二期はない鳴瀧塾には、若い女性・若い男性・おじさん、農業・漁業・商業・会社員・公務員などいろんな人が保内全域から集まっている。皆は保内の歴史の豪快な積極進取の精神に感化され、自然を大切にし、自然と調和した

現代生活を創造しようとしている。保内を見つめ、考え、新しく創造する人づくりは着々と進んでいる。二年間に築かれる保内を愛する人のネットワークは先輩鳴瀧塾生、後輩鳴瀧塾生とも結び付き、保内の発展の原動力となりつつあると信じている。保内を愛する若者のエネルギーと創造力と遊び心の魂、それが第二期はない鳴瀧塾だ。



清流保護条例とまちづくりの研修(中村市役所)



媛のくに フラッシュ



「四国一便利な村」へ
新宮村

一月三十日、

瀬戸内側と太平
洋側を結ぶ高知

自動車道が開
通し、当村は

四国で唯一イ

ンターチェ
ンジをもつ

村となりま

した。

開通以来、新宮インターチェン
ジの通行台数も当初の予測を大幅
に越えており、今後村としても高
速道路を最大限に活用した地域振
興を進めていきたいと考えていま

る文化伝承館
完成！

宮窪町

このほど

かねてより

建設を進め

ていた石文

化伝承館が完成しました。この石

文化伝承館は「石の町・宮窪」の

シンボリック建築物として造形され

ました。まだ準備不足ではありません

ですが、世界の石を集めて展示をし

ております。また石彫刻の実習室

す。

また地域の盛り上がりの一つと
して、インターチェンジのある新
成地区で五月三十一日に「新茶ま
つり」を計画しています。

これは「地域の活性化は自分た
ちの手で」ということで、地域の
特産品である新宮茶のお祭りを新
茶の時期に住民総出で行うもの
で、新宮茶の手摘み体験、手もみ
技法の実演のほか、バザーでは抹
茶だんご、抹茶クッキー、いのし
しうどん、お茶漬けなどを予定し
ています。もちろんお茶や山菜漬
けなどの販売も計画していますの

を設けており、将来は一般見学

者にも石の彫刻の体験ができる

よう考えております。多目的

ホールは冷暖房完備となってお

り、各種屋内スポーツやレクリ

エーション、シンポジウム、コン

サートなど、環境良く多目的に活

用できるようにしております。施

設の概要は石文化展示スペース三

百八十八平方メートル、多目的

で、ぜひ皆さんもおいでください。
おいしい新茶が皆さまをお待ちし
ています。



ホール九百九十九平方メートル

(収容人員千人)、会議室二室、

控室二室、観覧室、実習室、学習

室などがあります。まだ肝心の運

動公園は建設中であり、あと二年

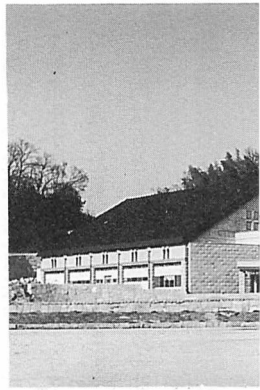
で完成する予定であります。石を

使った外郭は完成しており、伝承

館の通り道に使用されている大島

石の原石を見ることができま

す。どうぞお気軽にご来館ください。



いよいよ、四月から山村留学制度「国木ハイランドビレッジ」がスタートしました。この制度は自然に親しむ機会の少ない都会の子供たちを一年単位で預かり、健康増進を図りながら、人間性豊かな

広田へおいでよ！ 都会っふ 広田村

定員をはるかに上回る問い合わせがあり、現在、県内外の二十九人

子供に育てることを目的としてい
ます。
昨年十一
月より、全
国から募集

（県内十七人、県外十二人）の児童たちが元気に登校しています。生活形態は里親方式と寮方式があり、行政主導の全寮制は四国初の試み。

子供たちの交流による教育の相乗効果を期待しています。早くも山々には無邪気に遊ぶ子供たちの笑い声がこだまして、地域が明るくなっています。

過疎化で廃校寸前の村立高市小（昨年児童数四人）を守ろうと地元住民の強い要望を受け制度を導入したもので、今後都市と山村の



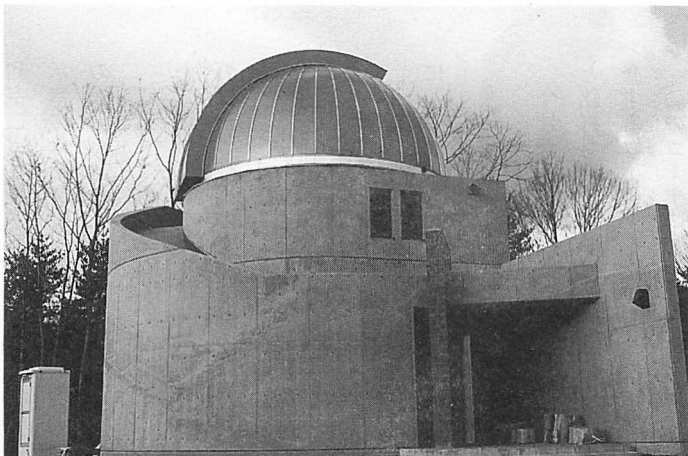
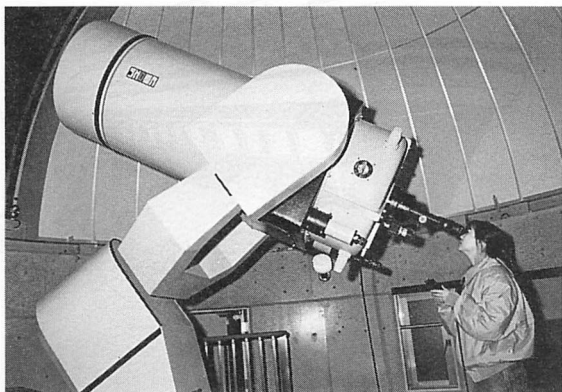
久万町は、「自然と共生する高原文化のまち」をテーマとしてまちづくりを進めています。豊かな自然や文化と触れ合う活動の一つとして、美しい星空を観察すること

により、自然の大切さと、心のやすらぎを感じていただけることを

願って、久万高原天体観測館をオープンしました。

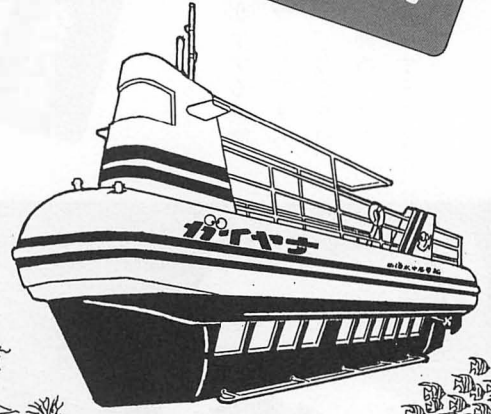
四国最大の六十センチ反射望遠鏡、六メートル四十席のプラネタリウム、星空や野鳥の自主番組を上映する百二十インチの大型マルチビジョンを備えた天体観測総合施設です。

今後、美しい夜空の感動を伝えるための天文普及活動を充実させ、美しい星々を見ることでできる夜空と共生する自然、生活環境を守り、一般の方々からアマチュ



アまで、誰にも愛される施設運営に心がけたいと思います。

ガイアナ発進!
西海町



二月十八日、注目の半潜水型水中展望船の船名が「ガイアナ」に決定。賞金五十万円目指して、北は北海道から南は鹿児島まで、予想を大きく上回る五千三百三十二通の応募がありました。このところ沈滞気味だった観光事業の起爆剤として期待している通り、まずは幸先の良いスタートとなりました。

定員五十名。船の座席が水面下にあつて、窓越しに海底のサンゴや熱帯魚が間近で鑑賞でき、今までは違った景観が楽しめます。

県内はもとより、県外からの問

い合わせも多く、その反響の大きさに関係者一同、就航にむけて多いに力が入っています。

四月二十六日の就航式で御披露目を行い、五月一日の鹿児島びらきより運行を開始します。この日は他にも、猿まわしや海上パレードなどもありますので、皆さん是非お越し下さい。

本町は、今年十月に町制四十周年を迎えます。記念イベント等も色々計画しており、その先陣をきつて「ガイアナ」いよいよ発進します。



夢が咲きました
三間町

異常気象とはいいながらも、三間平野にも着実に春がやって来いています。そんな三間町に春の訪れと共に、今春「三間町町民会館」がオープンすることになりました。

三間町が生活文化振興の拠点施設として整備した町民会館は、三間平野の中心に、グレーを基調とした落ち着いた佇まいを見せています。

施設は定員八百名（移動椅子席二百七十六、可動椅子席三百四十四、二階固定席八十、同立見百）のイベントホール、創作研修室、和室二室と展示室等からなり、展示室には名誉町民畦地梅太郎画伯の版画が常設展示されています。

これまで触れる機会の少なかった、演劇、コンサート、講演会等のほか、町民の文化活動の発表の場として、更には結婚披露宴と多目的な利用に対応できる施設となつています。

平成四年春、三間町、美沼の里に「夢が咲きました」。

今号から「媛のくにフラッシュ」と銘打ち、地域の最新的话题を紹介するコーナーを設けました。

このコーナーで紹介したい事項がありましたら、四百字詰め原稿用紙一枚程度に写真一〜二枚を添えて、「舞たうん・媛のくにフラッシュ」掲載希望と明記のうえ御投稿ください。

Town タウン

パソコン通信ネットワーク

ついに、 パソコン通信 100万人時代!!

Vol.22

Human Communication & Network



Ehime
Computer
Communication
Club

えひめコンピューターコミュニケーションクラブ

昨年、通産省の外郭団体であるニューメディア開発協会と郵政省の外郭団体である日本情報通信振興協会が、それぞれ国内のパソコン通信サービス約千局を対象にアンケート調査した結果によると、いずれの調査からも、昨年度の段階で、我が国のパソコン通信人口は延べ百万人を超えているということがわかりました。

一九八五年四月に電気通信事業法が改正され、我が国でもやっとパソコン通信が解禁されましたが、この六年間で、もうすっかり大衆的なメディアに成長したといっても過言ではないでしょう。

パソコン通信の大衆化に伴って、興味深い試みや特色ある運営を行っている局も増え、特に、地

域の自治体や団体などによるパソコン通信ネットワークが興味深い活動を展開しているといわれています。今後、地域づくり活動においても、地域の情報インフラストラクチャーとしてパソコン通信が

重要な研究対象になることはまちがいないことでしょう。

さて、私たちの「TOWNタウン」ネットも期待される地域BBSの一つですが、さらに大きく飛躍するためには、ネット運営の明確なコンセプト、ネット運営・管理にあたる専従スタッフの配置、県、市町村をはじめとする関係機関、団体等の積極的な支援が欠かせないものになっていきます。

情報の東京一極集中が大きな問題になっている昨今、大衆的なメディアとして大きく成長してきた

パソコン通信を、「地域の情報化」の手段として、地域内部での情報交換や、地域外への情報発信に有効に活用していただくよう関係者の皆様にお願ひ致します。

「TOWNタウン」のコーナー・マップ

(1992年4月現在)

【オフィス街】	半公開
はじめての方へ	公開
生活情報データベース	公開
商工情報資料室	公開
電気屋さん	公開
Bookセンター	公開
【ふるさと愛媛】	
魅どころ・遊どころ	公開
ふるさと宅配便	公開
愛媛の郷土芸能・文化データベース	公開
内子・五十崎きなはいや	公開
中島町でーす	公開
【メインストリート】	
掲示板	公開
タウン・ガイド	公開
年賀状コーナー	公開
会議・新コーナー提案	公開
ワープロ/パソコン・通信ガイド	公開
画像通信研究会	公開
TOWN速報	公開
ハロー!まいねーむ	公開
オンライン例会	公開
喫茶TOWN	公開
ルンルン女性専科	公開
TOWN湯上がり放談	公開
夢工房	公開
RIVERSIDE-INN	公開
フォーラムえひめ21	公開
タウン・ウォッチング	公開
タウン学園	公開
GLOBAL・TOWN	公開
こちら情報局 (南海放送クラブ)	公開
教えてください	公開
趣味のボード	公開
スポーツ	公開
園芸ひろば	公開
新・あおぞら市	公開
ビデオ・図書ライブラリー	公開
viva!あけはま	公開
【まちづくりHOTネット】	
まちづくりサロン	公開
ルポあの町この村	公開
まちづくり情報Q&A	公開
まちづくり情報・資料室	公開
【〒郵便局】	
【チャット】	
※〈ゲスト公開〉のコーナーは無料で、どなたでもご覧になれます。	

平成4年度 事業計画

-H.4.4.1~H.5.3.31-

(財)愛媛県まちづくり総合センター

(財)愛媛県
まちづくり
総合セン

ターでは、

県内各地で

進められて

いる地域づ

くり活動の

支援機関と

して、潤い

と活力に満

ちた新しい

愛媛のくに

づくりと二

十一世紀の

愛媛を創造

していく基

盤づくりを

進め、県内

の各地域が

進めている

歴史文化な

ど地域固有

の資源に根

ざした着実

り活動を支援するため、次のとお
り平成四年度の事業計画を定めま
した。

一 基本方針

(1)まちづくりに関する情報の収
集・加工・提供

急速に変化する社会の中で、新
しい試みや取り組みなどを模索す
る地域づくり活動に関する情報の
収集・加工・整理に努め、地域の
要請に応える「情報センター」と
しての機能の充実を図る。

なお、平成四年度は新たにまち
づくりに関する調査活動を行い、
その成果の情報提供に努める。
(2)まちづくりイベントの企画並び
に支援

地域主体のイベントは、地域の
人たちのまちづくりに対する意識
啓発とともに、住民主導の内発的
な地域づくりへの意欲を高めるな
どの効果が期待できることから、
地域主導のイベントを引き続き支
援していくとともに、「まちづくり
草の根文化講演会」を県下三箇所

で開催する。

(3)人材育成を通じたまちづくり活
動の支援

地域づくり活動のきわめて重要
なファクターとなる「ひと」が地
域に育っていくためには、次世代
を担う若い後継者を中心とした意
識おこしが不可欠であることから
「ひとが育つ」環境づくりのため
の諸事業を展開する。

二 事業計画

【情報関連事業】

(1)まちづくりに関する情報の収
集・加工・提供

①機関誌「舞たうん」の編集・発
行

地域のまちづくり活動の情報発
信と地域づくり活動者のネット
ワーキング誌として、地域に根ざ
したまちづくり情報誌「舞たうん」
を継続して編集・発行する。

なお、「舞たうん」の情報誌とし
ての機能をより充実するため、紙
面構成を一部検討し、内容の充実

を図っていく。

②情報収集用刊行物等の整備

まちづくり関連の各種刊行物の
定期購読等により、活字情報によ
る情報の蓄積に努めるとともに、
近年の情報メディアの多様化に対
応して学習用「まちづくりビデオ」
の整備を図っていく。

③主要事業成果の刊行物化と活用

「地域づくり研究サロン」「イベ
ント支援」「先進地交流研修ツ
アー」など、センターが実施する
各種事業に伴う事業成果の刊行物
化を図り、広く県内各地域の地域
づくり活動の活用にも供する。

④まちづくり調査研究事業の実施

センターのまちづくりに関する
調査研究機能を充実し、県内各地
へのまちづくり情報の積極的な加
工提供活動を行うため、まちづく
り活動に有用なテーマを選定し、
調査研究活動を進める。平成四年
度は、県内全市町村のハード・ソ
フト両面にわたるまちづくりの現
状や基本的方向性、民間レベルで
の活動状況等について調査し、刊

行物として広く地域に提供する。

⑤ 新鮮かつタイムリーな情報の収集・提供

県内各地域からのまちづくり情報の個別需要に迅速かつ的確に伝えるため、常に新鮮な情報の収集・加工に努め、個別需要に対しては面談・電話・FAX・郵送などのあらゆる手段によって需要者の希望に応じた情報の提供を行うなど、情報センターとしての機能の充実に努めていく。

⑥ パソコン通信ネットワークの実用実験

新しい情報メディア「コミュニケーション型パソコン通信」を、地域づくり活動に活用する実用実験活動を「えひめコンピュータ・コミュニケーション・クラブ」と共同で継続する。

【イベント企画援助事業】

(2) まちづくりイベントの企画並びに支援

① イベント情報誌の編集・発行

県内各地で繰り広げられる各種

イベントの総合情報誌として、(財)

愛媛県市町村振興協会との共刊により発行してきた「えひめイベントBOX」を、保存活用タイプの通年型イベント情報誌として内容充実を図りながら刊行物化し、関係各機関に提供する。

② まちづくりイベントの企画・支援

まちづくりを進めていくなかで、有志活動者が、地域の主要課題をより専門的に研究討議するための学習会や従来の市町村の枠を越えた広域的なまちづくりイベントを開催しようとする場合などに、これを積極的に支援していく。

③ 「地域づくり研究サロン」の開設

まちづくりに関する様々な課題や時代に即したテーマ等について深く検討を重ねていくため、専門家の意見を交えたサロンを継続して開設し、まちづくりに意欲を持つひとたちの研鑽とまちづくり意識の高揚を図っていく。

④ 「まちづくり草の根文化講演会」

の開催

地域住民を対象に、地域固有の歴史や生活文化に裏打ちされたまちづくり活動の原点を探り、個性的で独創的な活力と潤いのあるふるさとづくりを進めるため、まちづくりの先駆的実践者等を招いての講演会を、県下三箇所それぞれ開催する。

【人材養成事業】

(3) 人材育成を通じたまちづくり活動の支援

① 「地域づくり先進地交流研修」の実施

これからの地域づくり活動を担う地域在住の若者を、県外のまちづくり先進地に派遣し、全国レベルのまちづくり事例や実践者と交流させることにより、若い活動者の新たな意欲や能力開発に資するため、先進地交流研修を実施する。

② 「地域づくり助言活動システム事業」の実施

地域の自立と地域づくりに真剣

に取り組む地域の有志活動者グループを対象に、先進地域の実践者等による「助言グループ」を継続的に派遣することにより、地域づくりに関する実践的研究活動や地域づくり活動の理念や本質についての自主的な学習活動を支援する。

③ 県外の先駆的活動者との交流事業

刻々と変化するまちづくり活動の現状やポストまちづくり動向等について、県外地域づくり活動者との交流を通して新たな情報の収集に努める。

④ 「地域づくり助言活動フォロアップシンポ」の開催

地域づくり助言活動システム事業のフォローアップを進めるため、既実施町村の有志活動者グループを一堂に集めての交流集会を開催し、活動事例の発表や相互交流を通じ、グループ活動の重要性を認識させるとともに、その育成と活動の継続を支援する。

人 事 消 息

■平成4年度 センター職員 (☆印は新しいスタッフです)



☆研究員
富永 廣次
(肱川町役場)

☆研究員
藤原 元久
(大三島町役場)

☆研究員
松岡 正範
(共済農協連)

(後列、左から) 主任研究員 松森陽太郎 研究員 上ノ田誠一 研究員 国田 敦彦
(中列、左から) 事務員 毛利智恵子 所長 渡邊 智 事務員 安田 佳可
(前列、左から) ☆研究員 富永 廣次 ☆研究員 藤原 元久 ☆研究員 松岡 正範

- 4年1日付けで、2年間研究員として勤務された2名の活動の拠点が変わりました。これからも宜しくお願いいたします。



宇都宮 正 昭
(経済連)



山 岡 強
(御荘町教育委員会)

爽やかな風に吹かれるだけで、心も体もリフレッシュできる様な一年中で一番美しい季節になりました。あちらこちらから花の便りも聞かれます。
あなたも「春」を見つけに出かけてみませんか。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。
「舞たうん」編集係

二人のM.S.(毛利・安田)まで
〒七九〇 松山市二番町八丁目

二三四番地
愛媛県生活保健ビル三階
(財愛媛県まちづくり
総合センター)

TEL
〇八九九(三二)七七五〇
FAX
〇八九九(三二)七七六〇

発行・平成四年四月十五日
(財愛媛県まちづくり
総合センター)

えひめ地域づくり研究会議